

【様式①】令和5年度 学校評価書(小・中・特別支援)

学校名 三輪南小学校

校長名 石田 耕太郎

市の重点課題	学校の重点項目	自己評価	達成状況	学校関係者評価委員会から	改善の方向
希望あふれる未来を自ら拓く力を育むための教育課程の編成	総合的な学習、生活科、特別活動等において、まちづくり協議会や地元の岐阜女子大学等と連携し、地域の人的・物的資源を活用できるという「強み」を生かした多様で質の高い活動を推進する。ICTの活用事例をもとに学びあいが教育のDXを推進し、意味のある場面で活用を位置づけていくとともに、PTAを中心に言葉の大切さを親子で学ぶ活動を工夫し、子供の言語環境を向上させる取組を行う。	A	新1年生のタブレット端末実用の際に岐阜女子大学の支援を受け、GIGA開き(端末の初期設定や簡単な操作方法のレクチャー)が実施できた。1月には6年生の租税教室でも税務署との連携事業としてICT機器を活用した質の高い授業が展開でき、子供たちの理解度が高まった。また、ICT推進教師のリーダーシップの下、ロイノートやスターサブリを効果的に使って子供の学力向上を図っている。俳句づくりや標語作成などを通して、言葉に敏感になることを奨励した。児童会を中心に、ほかほか言葉の啓発が進み、温かい言語環境が整い学校生活の安心につながっている。	タブレット端末の使用において岐阜女子大の支援を受けて進んでいることはとても良い。また、学習において効果的に活用されつつあることは素晴らしいことである。しかし、その成果については検証されるべきである。 一方、「言葉による伝え合い」に苦しさをもつ児童への対応も考えていく必要がある。 そもそも、社会に開かれた教育課程とは何かを吟味すべきである。	R6年度以降は主題研究において「つなぐ」をキーワードに、児童の思考を深め広げる教育を目指していく。その際、ICTのみならず、言語環境にも重点を置き、豊かな言葉の使い手を育てる教育を目指す。 教育課程内にも地域、保護者を組み込むとよいかの視点をもち、コミュニケーション能力の向上を図る。例えばフラーサポーターとの触れ合いなどのような日常的な機会を仕組んでいく。
コミュニティ・スクールの機能の充実と岐阜市型小中一貫教育の推進	児童の発達段階に応じて、ねらいを明確にした教育活動の充実を図るとともに、校長を中心に幼保・中と連携し、校種間の円滑な接続を図る。よさ見つけ、挨拶、ノートづくり、読書習慣など、目指す具体的な姿を明確にし、手だてを共有しながら推進を図っていく。	A	夏休みを利用し、若手職員による幼・保見学を実施し、園児の姿から小学校との具体的な連携事項を共通理解することができた。また、2月には園児約30名と1年生児童との子供同士の交流が実施でき4月の円滑な接続につながる事ができた。中学校区で講演会を共にするなど、情報教育や食育など、保護者への啓発事業において協力体制が整い始めている。	幼保小の連携が、教諭・子供との2面から行われたことは、大変実質的である。子供同士の交流は小1プロブレム問題の解消につながる活動であり、今後も続けていきたい。 ソーシャルキャピタルを活用した学校づくりという観点から自校の重点を再考すべきではないか。	地域の強みともいえる保育所、小学校、中学校、高校、大学が存在する校区として、学校運営協議会の場でその連携について重要課題として取り上げていく。 また、学校の重点を見直し、ソーシャルキャピタルの視点から真に願う児童の姿を目指した重点にしていく。
あたたかさや働きがいにあふれる学校づくり	学校運営協議会の中心に、学校と地域、他の機関と効果的につなげることを通じて、目指す子どもの姿を共有しながら、それぞれの持ち味を生かし効果的な取組を推進していく。協議会でその在り方の検討を行い、非行やいじめの抑止、自信や誇りに繋がるよりよい人間関係づくりに寄与する施策を生み出していく。また、通信やHPなどで様子を伝え、地域全体へ広げていく。	A	5月の学年別運動会の参観と10月の授業参観を含む年3回の学校運営協議会を実施した。昨年度の反省を生かし、学校運営協議会が学校の要望を受け止め、会としてやるべきこと、強みを生かした施策を提案していくことができた。また、地域人材の発掘に公募だけでなくSNSを効果的に使うことで多様な人材の確保ができた。ふるさと大好き作品展の表彰式の復活や「お化け屋敷」への挑戦により、子供たちに地域の良さへの気づきや自らふるさとへ貢献することで得られる満足感を味わわせることができた。	学校と地域との連携はよくできている。ふるさと大好き作品展の表彰式の復活や新しい取り組みであった「お化け屋敷」でも地域と学校の協力が子供たちへふるさとへの愛着を醸成することにつながった。しかし、地域と教職員の連携が限定的な面はある。また、コロナ以前と比較し、その在り方には弱さもある。	先生方に地域を理解していただく機会を作れるよい。また、地域や保護者も積極的に学校に関われるよう啓発していくようにする。 ふるさと作品のデータ化を進め、それを活用して地域を知らない子供たちや大人に理解を図る機会をもつ。
災害、事故、感染症、生徒指導事案等に対する安全性の確保	「自分の命は自分で守る」という意識で、多様かつ実践的で生きて働く「命を守る訓練」を行うとともに、交通安全教室や安全サミットといった行事を地域の協力のもと充実させる。また、地域や中学校の防災の取組との連携を積極的に図る。また、減災を意識した環境整備に努め、繰り返し啓発活動を仕組み、一人一人の意識の向上を図る	A	4月の命を守る訓練では、消防署等の協力を得て、煙体験や消火訓練を実施できた。夏の安全サミットでは、岐阜大学と連携し、連れ去り防止について丁寧な学び、不審者対応については職員が研修し、さす股の使い方を学んだ。実体験により子供も職員も自分事として危機管理の大切さを学ぶことができた。交通安全協会主催の交通安全推進事業は、サインカーを活用するなどインパクトのある取り組みで保護者にも安全運転やヘルメットの着用を印象付けることができた。	学校での様々な取り組みにより、子供たちの防災に対する意識が高まっている。しかし、地域を交えての防災訓練を復活させ、いざというときに学校だけでは対応できない部分について備える必要がある。 また、生命尊重を大切にす道徳の取組や人権教育は継続して行うことが望ましい。それは、挨拶やよさ見つけなど形から入る指導をその形の裏にあるべき心や価値に気づかせることにもつながる。さらに、守られることに当たり前になっている子供たちの存在が危機される。	地域との防災訓練も含め、命を守る訓練のねらいを明確化し、年間計画を立てる。学校運営協議会においてもその計画段階から関われる部分については積極的に協力していく。そのねらいの方向としては、「自分たちでできる喜び」を大切に、「自分の命は自分で守る」という視点を重視していく。
教育環境と学校財務環境の整備及び効果的な活用	児童の安全・安心を最優先し、落ち着いた生活や学習を進めることができるよう、教育環境を整備する。優先順位をつけるなどして、学校予算などを有効に運用するとともに保護者・地域の協力を得て、校内外の環境整備に積極的に努める。	B	タブレット端末の活用が推奨されたことでペーパーレス化が急激に進み学習の在り方にも影響を与えている。紙や印刷機の財源の見直しを図り、適切に運用することを目指している。施設監査を機に備品の整備が進み、不要物の廃棄と倒壊防止、今後の購入計画ができた。倒木防止の高木伐採と剪定、防砂塵の散布で子供の安全を図った。今後、特に児童の椅子の入れ替えにおいては積極的に依頼を掛け、水環境整備にも要望を出していく。	学校の校舎の新旧による環境の違いは大きいといえる。古さゆえの環境悪化については、要求できる項目においてどんどん要望していく必要がある。 ペーパーレス化による弊害について理解する必要がある。デジタル化された情報は確認不足を引き起こしやすく、共通理解が不十分になっている。また、高齢者や機器の苦手なもののへの配慮が必要。	教職員の視点だけでなく、学校運営協議会においても積極的に環境整備に関わりながら改善について意見を出し、子供たちの安全確保のための要望を地域からもしていく。 ペーパーレスのメリット、デメリットを検証し、紙の予算を学校以外でも開き、ICT機器に関わる研修や講演会を開くことで地域や保護者も学ぶことができるように推進する。

HPアドレス: <http://www.gifu-gif.ed.jp/school/miwa-s-e/>